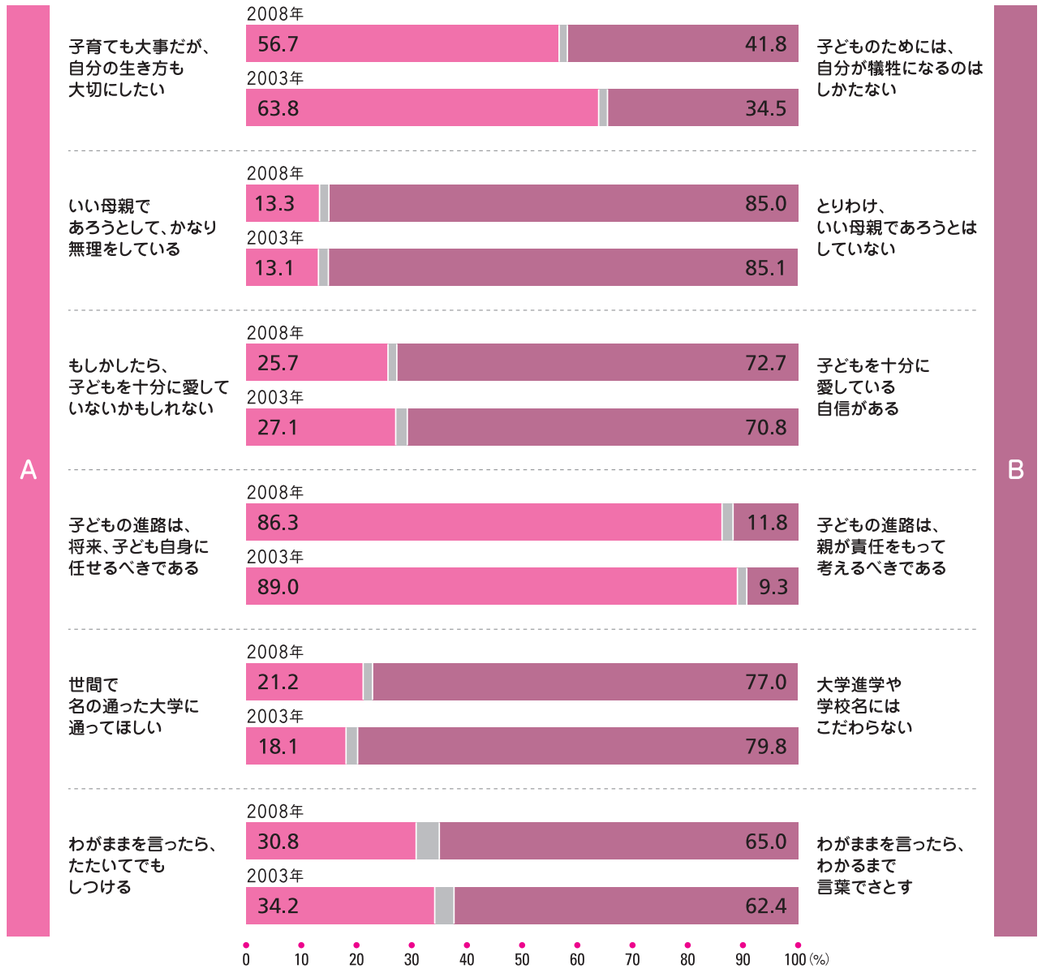
子育てやしつけに関する意識

「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」が減少

Q AとBの子育てに関する2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。

図8 子育てやしつけに関する意識（経年比較）



注1　無答不明（グレーの部分）があるため、AとBの数値を合計しても100%にはならない。
注2　10項目のうち、6項目を図示した。

★2003年に比べて「子育ても大事だが自分の生き方も大切にしたい」と回答した母親が約7ポイント減少し、自分の生き方より子育てのほうを優先する母親が増えていることがうかがえました。また、「わがままを言ったら、わかるまで言葉でさとす」（＋2.6ポイント）「世間で名の通った大学に通ってほしい」（＋3.1ポイント）と微増しており、全体的に子育てや子どもの教育に熱心な母親が増えていることがわかりました。

全国の保育現場からの声

私が考える幼児教育のこれから

幼児教育の現場は今、大きな変化に直面しています。
少子化、共働きの増加、保護者の価値観の多様化、地域の教育力の低下などを受け、幼稚園・保育所に求められる役割はますます大きくなっています。
また、この4月からは改訂幼稚園教育要領、改定保育所保育指針もいよいよ実施されました。
さまざまな状況変化の中で、今後どのような幼児教育・保育が実現されるとよいのでしょうか?
幼児教育に携わるさまざまな立場のかたに、お考えをうかがいました。

設問
❶幼児を取り巻く環境の変化や、幼児期の教育・保育の重要性がますます高まっていることを踏まえ、今後どのような幼児教育、保育が実現されたらよいとお考えになりますか？
❷❶の実現に向けて、課題は何であるとお考えになりますか？
❸課題の解決に向けた、取り組みのポイントは何であるとお考えになりますか？
※❶～❸全体をテーマとしてご執筆いただいた原稿は番号を記載していません

※掲載の順序は50音順です

公立●幼稚園

東京都墨田区 **墨田区立緑幼稚園**

幼児、保護者、そして教師が温かな人間関係の中で生き方を学び合う

園長 **荒木尚子**

❶人間関係が希薄になり、引きこもりやニートなどの問題を抱える現代、生涯教育の出発点にある幼児期の教育にこそ、しっかりとした人生の足固めとしての役割が求められています。生涯「夢」をもち「生きること」への喜びを素直に感じ取れる人間、さまざまな形で勤労意欲をもち、社会に貢献しうる人間の育成が大切だと考えます。どんな逆境に遭遇しても、社会の中で、自らの力で切り抜け、乗り越え、前進しようとする「力」こそ「人間力」として大切だと思います。そのためには幼児期に多様な体験を通して、主体的に自分自身の力を発揮し、友だちと協同の喜びを実感し、自己肯定感のもてる幼児の育成を実現することだと考えます。
❷人とのかかわりが十分できない幼児や保護者が増えてきている現状では、幼児期に、一人ひとりが自信をもち、豊かな想像力と表現力を身につけていくことが困難な面もあります。将来、社会に役立つ人間として主体的に取り組む姿勢とコミュニケーション能力をはぐくむことが望まれます。
❸そのためには、幼稚園という安心できる居心地のよい環境で、温かい人間関係の中で生き方を学ぶことが必要です。さらに、さまざまな年齢の人々とかかわり、自分の世界を広げていく経験も大切です。核家族化の中、保護者もほかの人々とのかかわり方に迷ったり、敬遠したりする現状を考えると、幼児だけでなく保護者も共に体験を通して育成していくことが必要です。まずは幼児と保護者、教師と幼児、教師と保護者、幼児同士が互いを信頼し合いながらかかわりを深められる幼稚園経営を創造していくことだと考えます。そのうえで具体的な視点としては、一人ひとりに応じて適切に援助ができる教師の育成が大切です。また、幼稚園教育の重要性を広く社会に伝えていくためにも的確な自己評価を実施し、公表していくことも重要であると考えます。

公立 ● 保育所

東京都目黒区 **ひもんや保育園**

一緒に思いきり遊ぶ中で「子どもの内面を読み取る目」をもってほしい

園長 **井上さく子**

１日の大半を保育園で過ごす子どもが、安心・安全で楽しい環境にあるかを日々考えながら、子どもたちと向き合っています。まず、一番に考えていくべきことは、子どもの生活スタイルです。大人の都合に付き合わされることが多く、子どものリズムでゆったりと寛げる時間が少ないことに気づかされます。また、自分の気持ちを発信しても受け止めてもらえなかったり、時間がないと断られたり、いつになったらぼく・私の願いが叶えられるのかと心の叫びが聞こえてきます。子どもたちは、さまざまな要因を抱えています。そんな子どもたちにとってせめて保育園生活は、ほっとする居場所にしてあげたいと思っています。ありのままの自分を出せる環境を整えていくことが大人の役割になってくると思います。

次から次へと課題を提供していくことは簡単なことですが、立ち止まって見ると子どもたちはさまざまな角度から「もっと思いきり遊びたい」「癒されたい」といったシグナルを発信しています。大人は、自分のすることは自分で決めたいという子どもの基本的な願いをどれだけ受け止められているのでしょう。また、一方では、体を使った遊びは疲れるからと輪の中から抜けていったり、ルールのある遊びは負けるから嫌いだからと、最初から入らなかったりする姿もあります。取り組む前から失敗を恐れずに、そこで学ぶことがたくさんあることを伝えていくことも大人の役割です。「人となり」を形成する幼児期にこそ、楽しいことも嫌なこともいっぱい体験し、積み重ねていってほしいと思います。

友だちと一緒にいるだけでうれしい、楽しいと心から感じることができる子どもになってほしいと願っています。そのためには、私たち保育者が目に見えない「子どもの内面を読み取る目」をもつこと、遊びを通して子どもと一緒に体を動かし、おもしろさを伝えていくことが大事ではないでしょうか。

公立 ● 保育所

埼玉県越谷市 **越谷市立蒲生南保育所**

専門性を高め、子どもたちが育ち合う関係をつくる

所長 **大沼順子**

子どもは本来、自分が興味や関心をもったことに、挑戦したり体験したりすることが大好きです。保育所の中でも、子ども同士がのびのびと遊ぶ姿は輝いています。反面、なかなか自分を出しきれない子がここ数年で増えているように感じています。まだ、成長期の子どもが、思うようにできなかったり、失敗したりしたとき、否定されるのではなくいろいろな考えや思いを認め合える関係、そしてハンディの有無や、国籍の違いなども認め合い、育ち合える関係を乳幼児期からはぐくむことが必要だと思います。そのためには、子どもが安心していられる環境をつくり、「大丈夫だよ」「あなたらしくね」とおおらかで豊かな人間性をもった子が育つ保育を実現していきたいと思います。

これらを実現するには、保育士としての専門性を高めることが大切になると思います。

子どもをとらえるとき、今までの経験だけでなく、誕生から就学を見据えて子どもの育ちを援助できる力をつけることが必要です。集団保育の場であっても、一人ひとりの子どもの内面の育ちをとらえ、子どもの取り組もうとしている行動を理解しながら援助できる専門性を身につけることだと思っています。

保育所の全職員が、子どもを育てる保育所の役割と責任について共通認識をもち、子どもが子どもらしく育つことができるように、さまざまな職種の人の協力のもと、子どもと向き合って保育が展開できること。そして、これらの子どもの育ちの様子を、保護者と共に喜び合い、共感し合う関係、子どもを真ん中にして何でも話せる保育所をつくっていくことだと思います。

国立 ● 幼稚園

山形県山形市 **山形大学附属幼稚園**

保護者と保育の不易性を共有し生涯を見通した援助を

園長 **小川雅子**

❶現代の情報化社会において、保護者の価値観や要望は多様化している。また、幼児の発達は個人差が大きく、一人ひとりに必要な援助も多様である。このような現状において、目先の情報に振り回されることなく、保護者と保育者が教育の不易な柱を共有することが大切である。そして、子どもの生涯を見据えた観点から、個人の能力の育成と公共的に生きる力の育成を目指した、柔軟で的確な保育が行われる必要がある。

また、幼稚園や保育所の運営については、職員間のコミュニケーションを大切にしながら効率的で効果的な組織運営の検討を怠らず、常に新たな工夫や改善をしていく活力のある幼児教育の実践が求められる。

❷**a** 保護者や保育者の、幼児教育を語る「言葉」と、現実場面での「実践」との乖離が、さまざまな問題の要因となっていること。**b** 母語習得期の子どもの言語環境において否定・制止・指示等の表現に、子どもにマイナスの暗示を与える言い方が多いこと。**c** 保護者の正反対のニーズへの対応。

❸**a** 保護者も保育者も、方法論に振り回されると、子どもの心底が見えなくなる。常に家庭や園における子どもの具体的な姿をもとに話し合い、生涯の発達を見通した適切な援助の工夫を共有することが大切である。世阿弥は幼少期の能芸の才能を「時分の花」と呼び、生涯かけて実現させる能芸を「まことの花」と呼んで区別した。幼児期の才能や問題を「その時分の花や課題」ととらえて、子ども自身に、生涯にわたって自ら探究していく態度を育てる援助の観点が重要である。

b 保護者や保育者の言動は強い暗示力をもっていることを意識して、日常の言葉かけを吟味し、子どもがどのような自己認識を形成しているのかを敏感に察知する必要がある。

c 子どもの生涯を見通した保育の観点を保護者と共有し、園や保育所の取り組みについては、学校評価を活用して常によりよい方策を探っていることを説明することが必要である。

私立 ● 保育所

東京都八王子市 **共励保育園**

保護者の協力を保育士が得ることで子どもたちは幸せになれる

理事長 **長田安司**

❶文部科学省は、第５回幼稚園教育専門部会（2006.6.30）において「遊び集団や遊びの群れが持続性をもって、自分たちで活動を維持していくという力や自分たちでグループをつくって活動していく能力が保育の中で非常に問われており、そのときに協同性とか協働するという能力がいかに幼稚園で育っているのかというのが非常に重要な意味をもっている。」と指摘した。

子どもは、３歳ごろまでは個々のイメージで遊ぶが、やがてあいまいながらもイメージの共有ができ始め、４歳には言葉を介して友だちとイメージを共有し、５歳になると集団での話し合いでイメージを膨らませることができるようになる。

共励保育園では運動会後の２カ月間は、自分たちのやりたいことを舞台で演じる劇遊びの期間として、連続的に活動に取り組むカリキュラムを組んでおり、子どもたちの協働する力を育てている。保育士は子どもたちの希望やイメージを聞きながら、集団での話し合いを引き出し、ストーリーの組み立てや小道具、大道具の製作など、子どもたちが自身で作り上げたという「小さな達成感」を感じられるように援助する。

当然意見の衝突や活動上でのトラブルが発生する。そうした苦難を乗り越え、人を信じ、みんなで一緒に何かを成し遂げる楽しさを味わうことが大切なのである。「大好きなお母さんに自分の劇を見てもらいたい」という発表会の日は彼らにとって特別な日となる。当然ビデオ撮影は禁止である。

❷こうした実践には、保護者の協力が不可欠である。共励保育園では、保育園の福祉的役割を前提にしながらも、入園時に「保育園は、親が子どもたちの成長を通し喜びや幸せを感じ、親としての役割の大切さを学ぶ場所」ということを説明している。保護者の協力を得ることができる保育士は幸せである。保育士が幸せでないと子どもたちも幸せにならない。

❸解決への道程は、保育の本質を問い直し、「安易な保育サービス拡大」を見直すことから始まる。

私立 ● 幼稚園

鹿児島県薩摩川内市 **川内幼稚園**

あえてじっくりと、ぶれない軸を中心にした「子どもたちの園」で育てる

園長 **押野典生**

❶「軸がぶれない」。昨年末、よく耳にした言葉です。しかし、私たち日本人は流行に流されやすい、世論の風に敏感であるなど、良きにつけ悪しきにつけ、どうも周りのことが気になるようです。急激に進化したグローバルな世界に否応なしに突き進んでいった人間社会は、あたかも経済優先社会を席巻していくような気がしてなりません。そして、経済はもちろんのこと政治まで、ひいては教育の世界まで影を落としそうな勢いです。そのような中、幼児期の教育だけでもぶれずに、しっかりと基礎を培いたいものです。

❷「ぶれてはならないもの」は、その基礎という変わらない真実です。見かけは強固な建物でもその基礎工事がしっかりしていなければ崩れてしまうことは、自然災害時にいやというほど見せつけられました。「見えないものに本物がある」ことを故東井義雄先生は「根を養えば樹はおのずから育つ」と言われました。「できる・できない」という競争社会の視点で子どもたちを育てようとする教育はよくない、とだれもが口を揃えますが、どうしても比べてしまう親や社会のあり方に、堂々と意見をする教育者は必ずしも多いとは言えません。知らず知らずに子どもたちを比較する言葉を発しているときもあります。その矛盾を勇気をもって正していくためには、集合体の協力が必要です。そのために、幼稚園や保育所にかかわる保育者の真剣な討議に加え、だれのための、何のための施設かを、再認識する眼を開いていくことが肝要です。

❸子どもたちの園であること。それは、すばらしいハード（施設や教材など）をつくるということではなく、人と人との関係を第一に考える「基礎づくりの幼児教育」を充実させることです。それは目には見えない教育ですが、混迷する今を乗り越える最上の近道であると思うのです。すぐに結果の出ることではなく、じわじわとにじみ出てくるものかもしれません。一朝一夕にできるものにいいものはないということ、それは人間の歴史が物語っています。

私立 ● 幼稚園

横浜市神奈川区 **幸ヶ谷幼稚園**

子どもを育てる一員として「子育てしやすい町づくり」に参加したい

副園長 **木元 茂**

❶日々繰り返される悲惨な事件を見るにつけ、情愛に溢れた家族の絆（きずな）づくりが、これからの幼児教育を考えていくうえで大きなポイントになると思う。幼いころ、家族の絆が希薄なために心の安定を得られず、不安定な精神状態で育ち、他者とのかかわり方がへたなまま大人になることが好ましくないのは明らかである。さらに、心の不安定な子が親になり、また孤独な中で子育てをしていくのは、見るに忍びない。

❷よりよい家族の絆を築くためには、まず親の立ち位置を、もう少し子ども寄りに変える努力が必要である。ワークライフバランスと叫んでも、父は深夜まで働き、女性の社会進出と称して母も労働力と考えられる。一方、家庭の中でほかの者が替わることができない「父と母」。当然子どもは自分の生活環境を選べない。ジレンマを抱え親子共々途方に暮れているのが現状である。さらに、その家族が住む地域のつながりも弱まっている。今や公園は誰が遊んでいるのか、町内会館は誰が使っているのか。

❸今、重要なことは、子育てしやすい町をつくることである。その地域にある、生まれてから小学校卒業ごろまでの育ちにかかわる施設・団体が、一堂に会して企画を出し合い横断的に連携していくべきである。行政の所管の都合や、幼・保の個々の立場からではなく、子どもを実際に抱えている側の視点から資源を活用できるようにするべき時期にきている。

父、母の不在の際にショートリリーフを頼めて、家族をフォローできる地域の子育て応援団として、町内会や町内会館が役割を果たせないだろうか。行事のための子ども会ではなく、子育てのための親子支援チームとしての新子ども会。父と母の代わりに、人として必要な《絆》という名の愛情を地域の皆さんからおすそ分けしてもらう。もらった愛情は、将来自分もおすそ分けのお手伝いをすることで、地域に還元すれば、絆はさらにつながっていく。

公立 ● 幼稚園

神奈川県秦野市 **秦野市立本町幼稚園**

幼児教育の本質をその質的な向上と共に広く伝えていきたい

園長 **木内清子**

❶幼児を取り巻く環境の変化や保育にかかわるニーズが多様化したことにより、子どもたちが教育や保育を受ける施設の形態もさまざまになりましたが、幼児教育の重要性が認識された今こそ、その質が問われ、幼児教育の理念を確実に実践していくことが求められていると思います。直接的・具体的な体験のできる幼児期にふさわしい生活を保障し、一人ひとりの体験や学びを豊かで確実なものにすること、特に、発達や学びの連続性の観点から、個の育ちと協同性の育ちを確実にして小学校教育に繋げていくことが必要であると考えます。

❷学校教育法の改正に見られるように、幼児教育がクローズアップされてはいるものの、一般的にはその本質についての理解がまだ十分とは言えない現実にぶつかります。「幼児の最善の利益」を最優先とした就学前教育の場としての体制づくりや幼児教育の望ましいあり方について、伝えていくことの難しさを実感しています。幼児の学びを確実にし、幼児の育ちの姿を通してその理解を得るためには、私たち教員が自己研さんを積み、豊かな教育を実践することであると認識しています。

❸学校評価の確実な推進によって、自らの運営や教育実践について振り返るとともに、課題や目標を明確にして取り組み、その質を向上させることであると思います。

また、幼児教育の質の向上は私たち教員の力量にかかっていることではありますが、教員養成機関のあり方、研修のあり方を始めとして、スタートを切ったばかりの特別支援教育の実践体制の整備や、学級の理想的な園児定数の考え方など、幼児教育を取り巻く環境の整備がなされることが望まれると考えます。

保育者養成大学

東京都北区 **東京成徳大学子ども学部子ども学科**

幼児教育の本質は子どもの暮らしにあることを胸を張って主張したい

准教授 **塩谷 香**

幼稚園教育要領改訂、そして保育所保育指針が同時に改定という大きな節目を迎えた幼児教育について考える機会をたくさんいただいた。保育所では「保育課程って？」「要録ってどう書いたらいいの？」などなど多くの戸惑いや疑問が聞かれる。私自身もどのように現場の先生方や学生に伝えればいいのかと迷いがあった。そう思いながらまた昭和23年刊行の「保育要領」を見直してみた。はるか昔学生のころ学んだ記憶がうっすらとある。改めて見てみると、驚くことばかりである。素直に感じることは、私たち大人が目指すものは「子どもの幸せ」なのだということである。幸せな成長を遂げ、幸せな社会の一員として幸せな大人になること、それがあらゆる教育の目的なのだと改めて思う。

「教育基本法に掲げてある教育の理想や、学校教育法に示している幼稚園の目的や、その教育の目標や、教育の一般目標など、こうした社会の要求をはっきりわきまえ、その実現につとめなければならないと同時に、この目標に向かっていく場合、あくまでも、その出発点となるのは子供の興味や要求であり、その通路となるのは子供の現実の生活であることを忘れてはならない」（昭和23年保育要領「まえがき」より）。

保育所は、まさに子どもの生活をその家庭ごと引き受ける場である。長い１日の中に子どもの現実の生活が流れている。だからこそ、幼児教育の本質を見失ってはならない。子どもの暮らしの中に教育がある。保育者は自信をもってそのことを社会に発信してほしい。これが私たちの考える幼児教育ですと胸を張って主張してほしい。そのためにも保育課程があるのではないかと私は考えている。この改定を期に今までの実践を振り返りながら、目指す幼児教育とはどんなことなのか改めて考え、そして発信していただけることを期待している。

私立●保育所

千葉県富津市 **わこう村和光保育園**

地域、子ども、保護者、保育者によるコミュニティ民主主義の実現を

園長 **鈴木眞廣**

❶人間同士や自然とのかかわり合いが弱くなってしまった現代社会にあって、「コミュニティ民主主義」の実現を目指したい。つまり、子育てを通して、親や保育者だけではなく、地域のいろいろな人が子どもとかかわり、それぞれの出番があって大切にされる「群れ」をつくることである。それは、改定保育所保育指針でも、大人も子どももかかわり合い、学び合ってともに生きていく「生活の場」としての保育所の役割が強調されていることにもつながるように思う。幼児期に多くの人の温かい眼差(まなざ)しが自分に注がれ、大人に押しつけられるのではなく、自分たちで選び決められるような経験をどんどん増やしたいと思っている。

❷現代では社会の仕組みが高度になり、便利な反面、子どもたちにとって生活やものづくりの本質が見えにくくなっている。だからこそ、素材に人間が直接かかわることで、暮らしに必要なものを生みだす生活を園が用意したい。また、保育がサービス化する傾向がある中、園が何でも抱えようとするのもよくないのではないだろうか。親は子育てをしながら一緒に育つ。親から子育てを引き取るのではなく、親と子が向き合うことを園が支えていきたい。

❸まずは親や地域に働きかけ、一緒に考える仲間を増やすこと。乳幼児期に地域と親がしっかりつながることで、子どもはその環境の中で安心して遊び、成長できる。

例えば保育士も、ある人は絵を描くのが得意、ある人は子どもたちと遊びを見つけるのが得意など、得意分野が異なる。それぞれの足りないところは補い合い、保育士だけで足りないところは家庭や地域に力を借りる、という考えで関係をつくっていければいいと考えている。私の園では力仕事が得意な父親たちに毎年手作りプールを作ってもらっている。子どもたちの「パパが作ったプール！」と喜ぶ様子を見ていると、親や地域の人たちが自然に園に入れる必然性をつくることも園には求められていることではないかと感じる。

私立●幼稚園

京都市中京区 **光明幼稚園**

「幼児期の知性」とは何かを問い、真の子育て支援に取り組む

園長 **田中雅道**

財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構副理事長

“幼児期にはぐくまれるべき知性とは何か”。前回・今回の幼稚園教育要領改訂、今回の保育所保育指針改定に委員としてかかわるとともに、幼稚園長という立場で幼児教育に携わる者として最も大切にしてきた課題です。

パソコンが普及し、特に事務系の仕事の内容は大きく変化しました。従来、会計処理やデータ整理など、単純だけれども専門性が要求される職種が会社の中にありましたが、現在ではその多くをパソコンが行います。また、インターネットが急速に普及し、日常生活が外国と結びついたものとなりました。単純作業の多くは、外国の労働力と比較される時代になったのです。その中で、これから百年先も日本が輝き続けるために、“幼児期にはぐくまれるべき知性は何か”は最も重要な課題です。

幼児教育は、環境を通して幼児の内発的な動機づけを誘発するとともに、生活を通して幼児自らが周囲の事象を体系化していく過程を大切にしています。生涯教育の基盤を培うという意味はここにあります。日本国民として最低限獲得しなければならない課題を学習することが重要視される義務教育とは、本質的な教育観が異なります。そのことをお互いが理解したうえで、一人ひとりの子どもにとって一番スムーズな接続は何かが、保幼小連携の最も重要な課題です。

核家族化、少子高齢化が進み、家庭を取り巻く環境の変化が、子育てへの閉塞(へいそく)感を強めています。子どもの養育の第一義的責任は家庭にありますが、社会で子どもを育てるという意識がはぐくまれないと親がつぶされてしまいます。幼稚園の新しい役割として、親が親として育つための支援活動として“子育ての支援”が盛り込まれています。“子育て支援”という名目で、子どもと親が向き合わない時間を多くする方向の従来の政策では、人は人としての幸せを感じることができません。子どもの成長とともに親も育つという、人間本来の命題に即した活動がこれからの幼稚園に期待されています。

保育者養成大学

愛知県丹羽郡 **名古屋芸術大学人間発達学部子ども発達学科**

不自由さや無秩序の中で生きる時間を子どもたちに取り戻す

教授 **田邊光子**

❶生活のすべてが効率的で、最短距離で目標にたどり着くように求められる現代の子どもにとって、健やかに成長していくために必要なことは、何であろうか。

ひとつには、人とかかわり人間関係を築いていく体験を十分重ねることである。相手を傷つけたり、ズルをしたりして自分を振り返ったり、葛藤(かっとう)やつまずきを乗り越えたりし、共感し合える関係を築くことが大切である。そうした体験を通して初めて、よいことや悪いこと、守らなければならないことなどを一つひとつ心に刻み自分をつくっていくのである。

ふたつめは、自然とかかわる体験を十分することである。木の肌に直接触れたり、雑草の中の生き物を探し回ったり、多少の危険も含む中で、子どもが本来もっている好奇心や探究心を満たし、発見する喜びや知る喜びを味わえるような体験を重ねたい。その中で子どもは、自分の意のままにならぬ自然を相手に、人間として生きていくために必要な力を獲得していくのである。

❷これらの実現に向けての課題のひとつは、今社会の中で子どもが経験できにくくなっている発達に必要な体験、特に、一見マイナスと思われるような体験を見直し、子どもの発達についての理解を十分深めることである。

ふたつめは、子どもが生活する環境がいつの間にか、危険やつまずき、困難さを取り除き、画一的になっていないかということである。時間がたつのも汗が流れるのも忘れ、全身を使って遊びに没頭できるような環境づくりが必要である。

❸これらの課題を解決していくためには、周りの大人が、子どもに関心をもちながらも、子どもが直面している世界を整理しすぎないことである。子どもが「子どもの世界」の中で「思いっきり体験」できることを重視していくことである。

そして、それができる時間と場を保障すること、子どもの生活の中に多少の不自由さや無秩序さなどを取り入れていくことである。

私立●保育所

茨城県東茨城郡 **飯沼保育園**

家庭養育力が低下する中多様な保育サービスの拡充が求められる

理事長 **東ヶ崎静仁**

❶今までの幼稚園・保育所は家庭の養育力を前提に教育・保育を担当してきました。しかし、現在の親世代は兄弟が少なく、核家族で育ち、家庭集団での育ちが不足しています。今後さらに女性の就労が期待される中で、家庭養育力の低下は避けられません。

子どもを取り巻く環境は、家庭生活の不規則によって、食事・遊ぶ・睡眠などの生活リズムの確立が困難になっています。親子の触れ合う時間が短くなり、親として「子どもの育ち」を意識する環境が一層かけ離れてきています。

子ども同士が育つ（遊ぶ）機会が欠落し、子どもを自分で育てたい親が、子育て中の交流や悩んだ時の相談もできません。親子共に安全・安心した保育サービスが求められます。

❷教育とは、子ども同士が遊び、遊びを通した経験・体験によって達成感・満足感を知り、失敗によって解決方法を知ることが「学び」となります。「子育ち」は子ども集団が重要で、その環境を整えることが急務です。

しかし、現行の幼稚園では低年齢児が利用できず、保育所では「保育に欠ける」入所要件に該当しなければ利用できません。子どもだれもが利用できて、子育て支援機能が備わる認定こども園も増えていません。

❸幼稚園・保育所を誰もが利用できるようにすることが望ましいですが、認定こども園を幼稚園・保育所がもっと取り組みやすくすることで量的拡大につながります。そして、都市部での待機児童解消や地方での人口減少地域で、施設をもたない家庭的保育など小規模保育サービスの検討をすべきと考えます。

多様な保育サービスの量的拡大を図るには「安全・安心」がキーワードとなります。親子で集団に参加できる子育て支援センター機能は子育て家庭に安心を与え、保育所機能は就労と子育ての両立支援、子どもの育ちの保障につながります。

保育園に子どもを預けて働く親のネットワーク

保育園を考える親の会

現代の幼児教育の課題を保護者に伝える役割も保育者は担っている

代表 **普光院亜紀**

❶子ども同士のかかわり　大家族や地域、子どもの集団の中で、さまざまなかかわりを通して自然に育っていた部分が、少子社会、核家族化、地域関係の希薄化の中では、育ちにくくなっており、保育園でも幼稚園でも、この点を意識して補っていく保育が求められています。つまり、けんかも大切な育ちの機会と考えて、子ども同士の主体的なかかわりを大切にしていくような保育です。意志疎通すること、共感すること、相手の思いや感情を理解すること、役割分担をすること、責任を果たそうとすること、参加することや一緒にやり遂げることの楽しさを、この時期に十分に体験しておくことが、その後の社会性の育ちにつながるのだと思います。これは、家庭では提供できない教育環境です。

❷体を動かすこと　8歳までに基本的運動のための神経回路がおおむね完成されることを考えると、体を動かすことは、もっと重視されていいと思います。日本の住宅事情では、家庭では飛び跳ねることも禁じられていますので、園環境は重要です。園庭で自由に体を動かして遊ぶ子どもの運動量と運動の多様さを見ると、遊びによる運動の重要性を感じます。

❸保護者の理解、そして、支援　しかし、このような幼児教育の課題は、保護者には、あまり理解されていません。学校の授業のようなものを幼児教育と考え、それを求める保護者も多いと思います。保育園や幼稚園は、保育のねらいや子どもの発達について保護者にも伝え、この時期に本当に必要なことを保護者に理解してもらう必要があると思います。けんかやどろんこ遊びについてクレームがくるという話も聞きますが、これからは、就学前教育の専門家として、きちんとした説明や計画の提示ができることが求められます。また、核家族の家庭の中には「社会」がないので、生活習慣をはじめ、いろいろなことを子どもが身につけることが、より困難になっていることを感じます。家庭の環境は、以前とは違うことを理解し、家庭を支援していただくことが必要だと思います。

ベネッセ次世代育成研究所からの発刊物のご案内

これからの幼児教育を考える

2008 夏

特集
幼稚園教育要領改訂のポイント

◎2008年3月に告示された幼稚園教育要領改訂のポイントを解説。また、幼稚園における子育て支援の実態について、ベネッセ次世代育成研究所が行った調査の結果や現場の実践例を紹介しています。

A4判 24ページ

2008 秋

特集
幼稚園教育要領改訂を日々の保育にどう生かす？

◎幼稚園教育要領の改訂を受け、現場ではどのようなことに留意して保育を展開していくとよいでしょうか。「規範意識」「協同して遊ぶ」という改訂のキーワードを解説する実践紹介も掲載しています。

A4判 24ページ

2009 春

特集
幼小連携の充実に向けて現場が取り組むべきこと

◎改訂幼稚園教育要領でも強調された「幼小連携」について、調査より明らかになった現状や実践例を紹介しています。座談会では小学校が幼稚園に期待することを取り上げました。

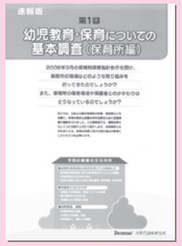
A4判 24ページ

幼稚園教育・保育に関する発刊物

第1回 幼児教育・保育についての基本調査（幼稚園編）速報データ集

◎全国の国公私立幼稚園の園長・管理職を対象に、幼稚園での教育的な活動や子育て支援の実態を明らかにした調査のデータ集

A4判 88ページ



第1回
幼児教育・保育についての基本調査（保育所編）速報版

◎全国の公私営保育所の所長（施設長・園長）、管理職を対象に、改定保育所保育指針への対応と保育所における保育の実態・課題について明らかにした調査の速報版

A4判 20ページ

幼児の遊びにみられる学びの芽

◎4、5歳児の遊びの事例を59サンプル収集し、遊びに含まれる学びの可能性や保育者のかかわりを分析しました。

A4判 72ページ

保育所での子どもの発達と保育のポイント

◎0歳から就学前までの子どもの成長発達と保育者のかかわりや、幼児の言動の意味と援助のポイントをまとめました。

A4判 112ページ

上記の刊行物はすべてホームページからご覧いただけます。

各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください。 ▶▶▶ ベネッセ次世代育成研究所 検索

http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/

編集後記　今回の号では、公私立・幼保の枠組みを超えて様々な角度から「幼児教育」についてのご意見をご紹介しました。その設立背景や歴史の違いから、幼稚園と保育所では強みとする点も異なるのでしょう。しかし、それぞれのよい点をまずは認め合うことが、子どもたちのよりよい環境を考えるきっかけになるようにも思いました。この情報誌がそのようなきっかけの一助になれば幸いです。（杉田）

「これからの幼児教育を考える」2009夏号
2009年5月20日発行
発行人　新井 健一
編集人　後藤 憲子
印刷・製本　（株）協同プレス
企画・製作　ベネッセ次世代育成研究所
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太
撮影協力　ヤマグチイッキ

©ベネッセ次世代育成研究所　◎無断転載を禁じます

次号予告
これからの幼児教育を考える 2009●Autumn 秋
次号は2009年9月下旬発刊（予定）
年3回の発刊（予定）です